別紙２

論文審査の結果の要旨

論文提出者　中川恵

別記 5 名の審査委員は、別掲の題目により提出された博士学位請求論文を審査した。論文審査の内容と論旨は以下の通りである。

中川恵の論文は、モロッコにおける伝統的なイスラム的統治システムの構造的な特徴を私蔵の手稿を含む多くのアラビア語一次史料を用いながら明らかにしようとしたものである。論文は、1890-1912 年のモロッコ危機を主な事例として取り上げ、マフザンと呼ばれる伝統的統治機構の長であるスルタンと、その治世を批判したスーフィー教団の指導者ムハンマド・ケッターニーとの間の確執を描くことを通じて、列強の進出という危機に直面する中で顕在化した統治システムの構造の把握を試みた。

この論文を構成する各章の内容を以下に紹介する。まず、「序論」では第一節の研究史で保護領期から 1990 年代にいたる研究の方法論的な特徴の変化を整理し、第二節で論文が依拠する基本史料を例示し、第三節で使用する基本概念の解説を行なった。中川の研究史と史料に対する方法論態度は、民族主義史観では無視されがちだった研究者と史料（とくにケッターニー教団関係）を再評価する一方、モロッコ史を継続した歴史として理解するために、モロッコ独自の歴史的概念を政治社会学的枠組みにもとづいて再構成・活用しようとしたところにある。

第一章「アサビズムからシャラフィズム」は、モロッコの伝統的政治システムの基本的な性格を示すために、王朝の権力基盤がアサビーヤ（部族の血縁関係による連帯意識）からシャラフィズム（君主がシャリーフ[預言者ムハンマドの子孫]であること）に移行した過程（シャラフィザシオン）を次章以降の叙述の前史として描いている。シャラフィザシオンの結果、自らシャリーフである君主は、他のシャリーフ・エリートと競合する中で、シャリーフの系統の管理を行なうことによって政権を維持した。

第二章「アラウィー朝マフザン組織と君主の役割・機能」は、シャリーフたる君主を頂点としたマフザン体制の構造的な把握を目指した本論文の理論的な骨子をなす部分である。マフザン体制において、君主は、政治の長である国王（マリク）として官僚組織と地方行政官を統括し、またスルタンとして軍隊を指揮して徴税を行ない、さらにアミール・ムーミニーン（信徒の長）という称号の下にアリームやマラブーなどの宗教的権威者に対する優越した地位を持つという多面的な役割・機能を有していた。中川は、マフザンをたんなる暴力装置と見る通説を批判して、マフザンが部族や宗教的権威者など社会の多様な集団と様々な「象徴交換」を行ない、社会に潜在的な「権力」を管理するという特徴をもっていたことを主張する。

第三章「ケッターニー教団の形成過程」は、20 世紀初頭にマフザン体制の危機に際して政治・宗教改革を目指したムハンマド･ケッターニーをめぐって、その出身のケッターニー教団の形成過程と、彼を支えた社会的ネットワークを詳細に分析した部分である。中川の結論は、ムハンマド･ケッターニーは、その称号の分析から当時の君主に匹敵する宗教的権威を持っていたが、そのネットワークは都市中心であり、武力を持つ部族の基盤が弱く、君主に対抗できなかった、というものである。

第四章「ケッターニー教団対マフザン：制度的対立か個人的対立か」は、モロッコの政治システムの危機をマフザン対ケッターニー教団の対立を軸に歴史的な分析を行なった、本論文の中心的な内容をなす部分である。モロッコの政治システムは、1844 年のイスリー戦争でのフランスに対する敗北、1860 年のテトワン戦争でのスペインに対する敗北の後、1880 年のマドリッド会議、1906 年のアルヘシラス会議によって、領土割譲や賠償金支払いによる財政危機、領事裁判権と「保護民」身分の増加によって危機に陥っていた。ムハンマド・ケッターニーは、列強に屈服しイスラムに反する施策をしいたスルタン・アブドル・アズィーズを廃位し、アブドル・ハフィードを新しいスルタンに条件付きのバイア（忠誠の誓い）によって推戴する運動の中心となった。しかし、新しいスルタンは、バイアで提示された列強支配に対する抵抗やイスラム的社会制度の保全などの条件に不満を覚え、ムハンマド・ケッターニーを暗殺する。彼が暗殺されたのは、第三章で見たようにアサビーヤ的な権力基盤を欠いていたからである。また、本章では、ケッターニー教団のヨーロッパ製品不買運動、印刷技術を利用した広報活動、そしてそのメンバーが関与した憲法草案の分析などを通じて、イスラム知識人によるマフザン体制の改革の可能性についても考察を進めている。

第五章「独立後のモロッコ王制」は、1912 年以降の保護領期を経て 1956 年に独立したモロッコの王制について述べた本論文の補論的な部分であり、国王が宗教的な権威を利用して対立する諸勢力の「調停役」となり、また保護領化以前と同様に、社会の諸集団との利益・象徴の「交換」関係を維持している点を指摘している。さらに、近年のイスラム運動による「挑戦」をめぐって、国王と運動指導者が持つ権力基盤の宗教性の要因を比較分析している。

本論文の最終部分である「結論」は、以上で考察の対象とした「16 世紀以来モロッコに特殊な政治構造」を普遍的なイスラムの政治観の中に位置づけることを試みている。ここでの主要な論点は、イスラム世界の最西端に属し、中心部のイスラム帝国秩序からは距離を持ち、自律的な独特のイスラム的政治秩序が形成されてきたモロッコにおいて、宗教的権威者と信徒の指揮者（カリフ）との関係が普遍的な政治秩序のモデルに準拠した形で再現されたことである。条件付きのバイアの解釈をめぐって争われたムハンマド・ケッターニーとスルタンとの確執は、イスラム共同体における政治支配の正当性をめぐる議論を導く問題であり、まさに現代中東政治で最重要の課題とされる政治=宗教関係を考える上で一つの重要な事例として扱うことができるのである。

本論文に対して審査委員会では、モロッコ危機に関する従来の研究は諸列強の動向に注意が向いていたが、モロッコ内部、とくに支配者スルタンとこれを批判するイスラム知識人の関係という内側の視点から描いている、マフザン、アサビーヤをはじめとするモロッコ史独自の概念を現代的な政治社会学の枠組みの中で再構成しようとしている、手稿など多くの一次史料を用いた手堅い実証研究である、などの点を評価する意見が出された。一方、論文構成上の問題で 1912-56 年間の保護領期が扱われていない点、論文の中心概念である「交換」論によってアサビーヤ概念を再解釈する可能性、ハイルッディーン等同時期のイスラム世界の改革運動との比較の可能性、オスマン帝国のカーディー制度との比較、バイアの形式、その他いくつかの概念の使用法と定義をめぐって質問が出された。中川恵は、これらの質問に対し、訂正個所の理解を含めて、委員を満足させる相応の回答を行なった。

中川恵の論文は、近代モロッコの統治システムの構造的特質を、モロッコ史固有の概念を政治社会学の理論枠組みの中で再構成し、また普遍的なイスラム政治モデルと比較することによって明らかにした、一次史料にもとづく実証的で斬新な研究として高く評価できる。また、審査に際し、前述の審査委員の質問において用語法や叙述の形式などいくつかの問題点や瑕疵の指摘があったが、審査委員会は、これらの点は上に述べた高い評価を大きく減ずるものではない、と判断した。したがって、審査委員会は、全員の一致した見解として博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。